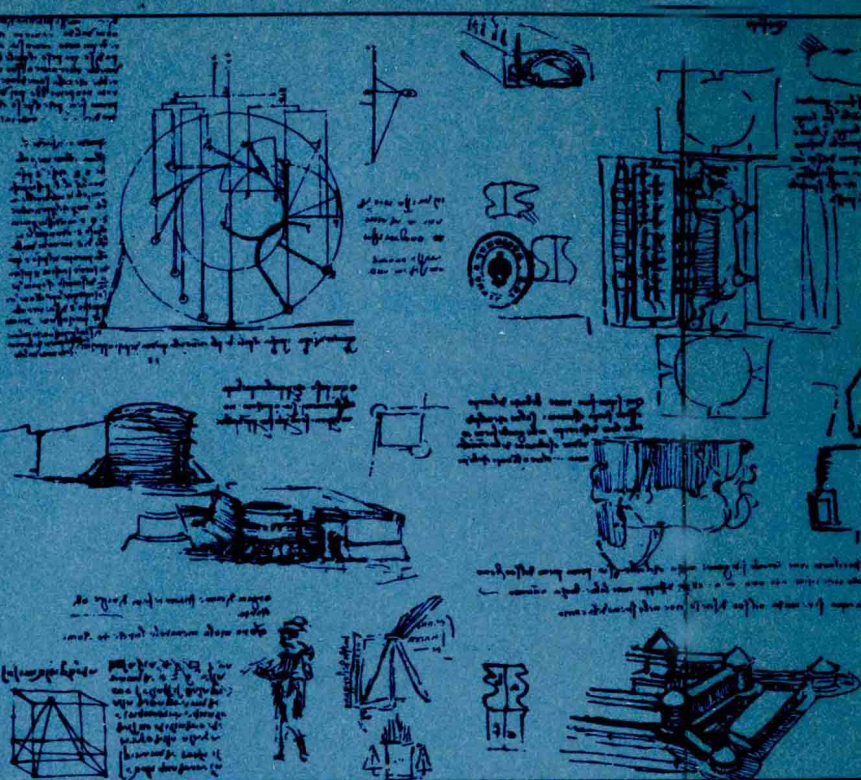




文芸批評とイデオロギー

——マルクス主義文学理論のために——

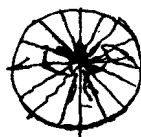
T. イーグルトン著
高田康成訳

岩波現代選書

文芸批評とイデオロギー

—マルクス主義文学理論のために—

T. イーグルトン 著／高田康成 訳



岩波現代選書

文芸批評とイデオロギ―

岩波現代選書 40

一九八〇年一月二三日 第一刷発行 ©

定価一七〇〇円

訳者 高田 康成

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五十五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・二六五・四二二
振替東京六二六三四〇

印刷・三陽社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

日本語版への序文

日本の読者諸氏に本書を問うにあたつて、恐らく、本書が書かれた歴史的背景、個人的経緯を簡単に説明しておくのが便宜であらう。

『文芸批評とイデオロギー』は、一九三〇年代のクリストファ・コードウェル^[1]以来はじめて英国でなされたマルクス主義美学理論の試みである。このことは、本書の強味でもあれば、同時に限界ともなっている。なぜなら英国のマルクス主義文芸学の伝統は瘦地と化して久しく、伝統を欠く知的冒険は無謀たらざるを得ないからである。伝統の荒廃にはいくつかの理由が考えられよう。島国という地理的、歴史的制約に由来する知的偏狹性が、理論を重視し発展させてきたヨーロッパから我々を孤立させてしまったこと。マルクス主義文化論には、いまだに、不毛なズダーノフ主義^[2]が蔓延していること。理論的思考を毛嫌いする英国的思考に染着いた経験主義。これらが相まって、英国の「文化論左派」^[3]にロマン主義的ヒューマニズムが蔓^{はび}こることになつてしまったのである。このロマン主義的ヒューマニズムは、産業資本主義批判にあずかつて力があつたが、その分析は本質的に唯物論たり得ず、観念論に墮すきらいがあると言わねばならない。

一九三〇、四〇年代のマルクス主義美学の遺産は、これらさまざまな要素から成ると見てよからう。

ある時は、史的唯物論の化粧を施されたブルジョワ経験論として、またある時は、スターリンとシェリーをないまぜた奇妙なものとして姿を現わした。『スクルーティニー』^[4]、「実践批評」^[5]に代表される一九五〇年代の洗練された観念論批評の隆盛を前に、マルクス主義美学は手をこまねくばかりであった。今世紀の社会主義文芸批評の中で最も重要と目されるレイモンド・ウィリアムズも、このような状況の下では、貧弱なマルクス主義の遺産を棄て、独自の体系を打ち立てねばならなかったのである。

マルクス主義美学に私が関わるようになったのは、ウィリアムズの影響の下においてであった。一九六〇年代初頭のケンブリッジにおいて、イングランドは北部の労働者階級に生まれ育った私などにも意味のある文学論を講じてくれたのは、ひとりウィリアムズのみであった。ウィリアムズからは多くのことを学んだと言わねばならない。しかし、一九六〇年代から七〇年代の前半にかけて、英国労働党運動^[6]の失墜、押し寄せる帝国主義の危機、ヨーロッパにおける革命的社会主义の台頭、とまぎらわしく変わる政治情勢を目のあたりにした我々の世代にとっては、一世代前の「文化論左派」の血をひく「左派修正主義」^[7]は、スターリン主義、社会民主主義同様、政治的に全く無能に思えた。ウィリアムズに対するかなり綿密な批判から本書が始まっているのは、このために他ならない。ウィリアムズの伝統を継ぐと同時に批判するものとして、本書を彼の思想との関連において位置づけたかったの

である。

一九六九年、オックスフォード大学に講師として着任するや、私はマルクス主義美学を講じることにしたが、当時の英国では殆ど未開拓の分野に等しかった。ゴールドマンとルカーチくらいはかじっていたが、実際のところ、その他に関しては無知に近い状態であった。しかし、私の関心と呼応するかのように、ヨーロッパのマルクス主義文学理論に注目する学者、学生グループが英国にも現われ始めた。もとより、文学を研究するということは、ある意味で、現実の政治闘争からかなりかけ離れたことであり、従って、我々の著作が「理論主義」により特徴づけられたとしても無理からぬことであったのかもしれない。しかし、一九六〇年代後半の動乱を経て紋切り型のマルクス主義が意味を失うや、言語、文化、意識、イデオロギー等、我々の分野に直接関わる問題が再び問われ始めたのであった。本書は、確かにルイ・アルチュセール、ピエール・マシュレー等のヨーロッパの理論家を意識して書かれてはいるものの、実質的には、熱病のごとく激論を交したかの動乱の日々の所産である。唯物的、「科学的」基盤に立って文芸批評を構築することにより、英国ブルジョワ文芸批評を根本から批判するとともに左翼の立場から「文化」の議論に加わる、というのが本書の趣旨である。

少なくとも英国においては、いまだにこの種の議論は活発に戦わされている。自らの関心を理論的に明確に認識するためにはマルクス主義をおいて他にない、と多くの文学研究者が感じ始めている。

程度こそ異なれ、アメリカでも同様のことが起こりつつある。舌足らずのところの多い本書が言おうとするところを取り上げ、論議してくれた多くの友人を思い出す。時は移れど理論と実践の問題は変わらず、両者をいかに関連させるかは依然としてむづかしい。本書を書き上げて以来、そのことはますます困難になっているとも言える。マルクス主義、記号論、精神分析学の間に織り成される関係の問題に私自身関心を持つようになったためである。そして、このことは一個人の関心に留まらず、英国一般の潮流にもなっている。しかし、この分野の重要性を認識すればするほど、この分野を政治闘争という日々の現実結びつけるむづかしさを痛感せざるを得ない。ただ、いくつかの突破口がある。後期資本主義が生み出した諸々の文化機構・制度を変革し、それに代わる形態を発展させることもそのひとつであろう。目下英国で輪を拡げつつある革命劇場（私は脚本を書いている）も一例であろう。

活力ある弁証法的思考が常に完全たり得ないように、『文芸批評とイデオロギー』も決して「完全」なものではない。訂正すべき点もある。また、例えば、「学問的形式主義」のように歴史が変革してくれるのをまたねばならないところもある。英語版のはしきを書いたとき、訂正すべき点を意識しつつも、本書をこのままで世に問うのが最良であると信ずる、と記した。この日本語版の序文を書くにあたって、私は同様のことを言いたい。本書をこのままで日本の読者諸氏に問うことにより、我々

の限界と同時にその限界を乗り越えようとする我々の努力がご理解いただけるものと信ずるからである。そのような読者諸氏に翻訳を通じて読んでいただけることは真に光栄と言わざるを得ない。本書が、志をともにする日本の方々との親密な交流の先がけとなることを願ってやまない。

一九七八年六月

テリー・イーグルトン

はしがき

現在の英国において、マルクス主義の立場に立つて唯物論美学を構築しようとするれば、誰であれ、自らの不備をまず痛感せざるを得ない。それは、この分野に真に多くの問題が山積し、解決の見通しも立たないということだけに留まらない。英国というヨーロッパの辺境から口を挟もうとしても、所詮ヨーロッパという由緒ある家のふりの客、居候、あるいは他所者として相手にされぬ所があり、大陸との隔りに改めて思い到るのである。以下の頁を埋める論考は、このような当惑に直面しつつ難産の末、生み出されたものである。当惑は、恐らく、文学の価値の問題を扱った最終章に最も顕著であろうが、そこでは、これらの問題を本格的に議論するための前提として、暫定的に問題整理をしたにすぎない。しかし、当惑はそれに留らず、第Ⅳ章『ニュー・レフト・レビュー新左翼評論』初出の論稿を改訂増補したもの』の極めて省略的な表現にも明らかであろう。文学史の中でも複雑で扱いにくい期間を単一の枠組へつめ込もうとするあまり、勢い不正確な公式化、不適當な譬喩、偏った牽強附会な解釈に堕したきらいもある。しかし、この章が本書でまず初めに（当然、単純化、図式化の危険を犯して）書かれた部分であり、従って、できれば、より厳格な理論的公式化を心掛けた直前の二章に照らしてお読みいただければ幸

いである。このように誤りや舌足らずの表現で満ちているものの、本書をこのままの形で世に問うのが最良であると信ずる。それは私自身の限界の至らしむところでもあり、また恐らくは、英国において目下支持されることの稀な思想の避けがたい運命とも思えるからである。

本書を執筆するにあたり貴重な助言を惜しまず著者を励ましてくださった多くの方々に衷心より感謝したい。ペリー・アンダソン、フランシス・バーカー、マイク・ユークト、ジョン・グッド、ジョン・ハリソン、クインティン・ホア、フランシス・マルヘン、ポール・テイケル、アラン・ウォール、ジョージ・ウォトンの諸氏は、貴重な時間を割いて草稿をご批評くださった。特に御名前を記してお礼申し上げたい。また、普通では考えも及ばない場所^[10]でこの種の思索を育み続けてくれた、オックスフォード大学マルクス主義文芸批評研究会の先達、友人に積年の感謝を献げたい。唯物論的文芸批評に對する彼らの献身的な努力がなかったならば、本書が書かれることはまずなかったであろう。最後に、さまざまな場所で議論する機会を得た同様の研究会、個々の方々にもお礼申し上げる。

著 者

目次

日本語版への序文

はしがき

I 批評イデオロギーの変遷……………三

II 唯物論文芸批評のための諸カテゴリー……………五

III テクストの科学序論……………八五

IV イデオロギーと文学作品の形態……………一四九

1 マシュー・アーノルド……………一五一

2 ジョージ・エリオット……………一六〇

3 チャールズ・ディケンズ……………一八五

4 ジョウゼフ・コンラッド……………一九四

5 ヘンリー・ジェイムズ……………二〇九

6	T・S・エリオット	二六
7	W・B・イェイツ	三五
8	ジェイムズ・ジョイス	三〇
9	D・H・ロレンス	三六
10	結語	四一
V	マルクス主義と美的価値	四三
	原注	八五
	訳注	一〇〇
	訳者あとがき	三七
	人名索引	

著者、訳者の
亡き父に捧ぐ

我らが最善は言葉を生むこと
現実（じゆんじつ）に目を瞑（つむ）らせる
かの恐れを解き放つために

口を噤（しむ）む者のために舌となれ
不正に抑えられし仲間のために
活（い）ける声（こゑ）となれ^{〔11〕}



I 批評イデオロギーの変遷

文芸批評という研究活動は、空気のようにあって当り前の存在にか映らないかもしれない。その起源は自然発生的であり、その存在は当然のものに見える。文学がある、故に——我々か文学を理解し味わいたく思う以上——批評もある。文学にかしづく侍女としての批評、それは文学につきまとう影として、あるいは共犯者として、幽霊の如く『四つの四重奏』^[1]の言葉を借りれば）所を択ばず文学の先廻りをする。「先廻りする」とは、目下の関連では、妨害するためにも、先導するためでもあり得る。批評の仕事か作品と読者の間に生ずる渋滞を円滑にすること、作品を嚙砕き容易に吸収してもらうこと、であるならば、批評は生産物としての作品と消費者としての読者の間に見苦しい図体を介入させることであってはならない。しかし、いかにすれば文学という対象に「幽霊の如くつきまとい」ながらも対象を暗くせず、にすむことが可能であろうか。ここにおいて、批評は解きたい矛盾にはまり込んでしまいうように見える。もし、その任務が作品の実相を素直に我々に示すことにあるならば、自らが仲を取り持つものと交わ

ることは許されぬ筈である。そのような交わりは、「専有」という言語道断の行為に通じると言えよう。しかし、いかにすれば自然とも見える居候の生活に甘んずることなく、このことが可能になるうか。いかにすれば、作品の生命^{テクニク}へ慎しやかに服従し、自らを空しうする、つまり所、自己拋棄にすぎぬ形態を避け得るのか。もとより、文芸批評はなべてその限界を告白せねばならない。しかし、ブルジョワ批評は、自らの過剰をはばからず、片寄った、押付けがましい、その場限りの身勝手な主題を自虐的に主張してさも自信ありげに見える。そのような主題は、いかに巧妙精緻に提示されようと、作品という汲めど尽せぬ神聖な泉の前には、所詮三文の値打もない。しかし、饒舌をもてあますことが無益だとしても、沈黙すればことがすむというわけでもない。批評は無用の長物かもしれない。しかし、かといって廃棄処分できる程ことは熟していない。あまりに多くの問題がさまざまな形で山積してしまっているのである。

批評の根本的な自己不信は高じて、現に、「素人の」道楽であるのか「玄人の」研究であるのかさえ見分けがたくなっているのが現状であろう。読書程自然な行爲はない以上、玄人筋のものでないことは明らかである。それは、単に頁を仕舞まで繰^くるだけのことである。当然、繰^くりながら何がしか特別の注意が払われることになるうが、それは本来育み、感化することはできても教えることのできないことである。しかし、批評は素人筋のものである筈もない。なぜなら、文芸研究という集約労働的

産業——学校、大学の研究者、教授陣、出版社、各種文芸協会——が、化学実験よりもワインの品定めに近い認識形態に依存しているとは考えられないからである。英国に国文学が初めて学問として制度化されたとき、このジレンマは、素人玄人両認識形態を巧妙に融合することにより「解消」されたのであった。英文学なるものが学科の名に値いしないことは一見して明らかであった。英文学の草創期に「伝統を誇る」大学の教授職にあった英国紳士たちは、召使の使い方について訓練を必要としなかったのと同様、英文学の読み方についてもことさら訓練を必要としなかった。といったところで、彼らは紛れもなく英文学教授だったのであり、その職業に適わぬ文士気どりの意識は隠しおこせる筈もなかった。手近な解決策は、英文学を対象としながら、それが他のものであるように装うこと——体系的に「古典学」とすり替えること——であった。これほど世間体のよい衣裳はあろう筈もなかった。言うまでもなく、カトゥッルスと同様クラップ^[2]について一家言を成すのは自由である。しかし、英文学研究は、個人的な好みの問題ではあり得ず、ましてやそれを公然と触回ることでは断じてない。イエイツの言うように、そのような吹聴は商人に相応しい——歴史の皮肉と言おうか、実際に商人を父とするF・R・リーヴィスに相応しかった。そして、この「素人」趣味は、文学を対象とした玄人の知的職業とは別の歴史を歩むこととなった。今日の批評に実証主義と主観主義の二元論構成がなお醒めやらぬ所以である。